

ハイブリッド環境下の大学図書館における学術情報サービスの構築

渡邊, 由紀子
九州大学附属図書館

<https://doi.org/10.15017/17922>

出版情報：九州大学, 2009, 博士（学術）, 論文博士
バージョン：
権利関係：



5. 図書館員の専門性育成による図書館サービス機能の強化

本章では、「人」の面から見た大学図書館の課題を議論する。大学図書館が、電子媒体と紙媒体の資料が混在するハイブリッド環境下において学術情報サービスを効果的に行うためには、電子リソースの利用を促進する新しい電子的サービスを展開する一方で、図書館が収集・所蔵している伝統的な紙媒体資料の利用度を高めるためのサービスも充実させる必要がある。本章では、これらの必要性に対し、図書館サービスを支える図書館員の専門的な知識と技術を向上させる人材育成の方法を検討する。

5.1. 図書館員に求められる専門性と人材育成の方策

大学図書館のサービス機能を強化するためには、高度の専門性・国際性を持った専任の図書館員の存在が不可欠である。そのため、そのような図書館員の人材の確保・育成方策を検討することは、大学図書館の課題の一つとなっている[4]。専門性という面では、近年の大学図書館を巡る状況の急速な変化に伴い、図書館員に求められる能力・知識・スキルも変化してきている。しかし、大きく変容する環境の中で、変化することのない、あるいは変化を伴いながらもなお旧来のものを保持し続けなければならない分野が大学図書館にはある。例えば、貴重な情報を含んだ紙媒体の図書資料は、今後どれほど電子メディアが発達しても存在しなくなることはないであろうし、世界中の全ての情報が電子化されようとしている電子リソースの時代にこそ、各図書館が所蔵する古典籍等のオリジナル資料の重要性は増していくものと考えられる。このような伝統的な紙媒体資料の保存と提供が、ハイブリッド環境下の大学図書館にとって将来とも重要な任務であり続ける以上、図書館員にはそのための専門的な知識と技術が要求される。

大学図書館員に求められる専門性を考える上で参考となるものに、国立大学図書館協会人材委員会が検討した大学図書館員が有すべき能力等のコンピテンシー・モデルがある[129]。コンピテンシーとは、「仕事上の役割や機能をうまくこなすために個人に必要とされる測定可能な知識、技術、能力、行動その他の特性のパターン」であり、特定の職務を遂行するために必

要なコンピテンシーとその行動特性を列挙したリストがコンピテンシー・モデルである。職務遂行には一般的及び専門的コンピテンシーの両方が必要となるが、大学図書館活動に直接関連した能力等である専門的コンピテンシーは、経営管理、情報資源の管理、情報サービスの運用、情報通信技術の活用の4つに大きく分けられる。その中で、情報通信技術の活用において、大学図書館員は、インターネットや標準的な情報通信技術を活用して、サービスの高度化、適切なアクセスツールの提供を行い、関連する情報通信技術について継続的にモニタし、最新の動向の把握に努めることが求められている。他方、情報資源の管理においては、大学の教育研究に必要な情報資源を収集、組織化し、検索可能な形で提供するために必要な知識を持つこと、特に、古典籍等の特殊資料について適切な取り扱い、保存、利用方法を策定し、実施することが求められている。そして、それらのコンピテンシーを修得していくためには、所属する大学や国大図協等の専門職団体による研修や継続的な学習にもとづく自己研鑽が不可欠であることが指摘されている。

大学レベルで見ると、九州大学附属図書館でも館長をはじめとするトップが大学図書館員の専門性ということを強調し、「サブジェクトライブラリアン育成」について全国的な国立大学図書館協議会総会等で機会ある毎に提言している[1],[130],[131]。それは、単に職員研修の機会を増やすとか職員に自己研鑽への発奮を期待する等というだけの問題にとどまらず、最終的には大学図書館員の人事管理制度の見直し、専門職制度の再整備までを含めた解決策を考えるべきではないかということも同時に指摘していた。

同館は、九州大学と九州芸術工科大学の統合、国立大学法人化、キャンパス統合移転を控えた平成12(2000)年11月に、変革時を迎えて策定された大学の基本方針に沿って、図書館の長期目標・理念を次のように定めた[132]。①大学における教育研究の基盤設備として学術情報を収集・組織化・保管し、これを利用者の学習・教育・研究のための利用要求に対し効果的に提供する、②従来からの図書館機能に加え、電子化資料の整備を進める、③大学改革と活力ある大学作りに積極的に寄与する。また、これらの長期目標・理念を実現するにあたっては、①学問的雰囲気と活気に満ちた学習図書館の実現、②体系的な蔵書と豊富な研究資料が確保され、ネットワーク社会の恩恵を享受できる機能的で充実した研究図書館の実現、③経営感覚を備えた事業体としての大学図書館の運営、の3つの観点を設定した。

ここに掲げられた目標を達成するために、図書館員には次のような専門能力が求められている。図書館の全容と方向性を把握し独立事業体としての図書館を経営・管理する能力、あるいは、最新メディアをも視野に入れたコレクションを組織・構築する能力、自館の蔵書に精通し

適切に運用・保存・管理する能力、情報の洪水の中から利用者ニーズに応じて情報を検索・提供する能力、さらに、各専門分野の研究者に対して適切に研究支援する能力などである。図書館は、これらの能力を持った専門家集団を図書館内に育成していかなければならない。

現場の図書館員を育成するために、各大学図書館では、全国レベルや地区レベルで開催される学外研修に職員を参加させる一方、学内研修を実施して図書館員の専門性の育成や専門技術の向上を図っている。九州大学附属図書館においても、人材育成のために様々な研修会を実施してきた。最近では、情報システムが目覚ましい普及に合わせ、利用者の要求や連携する他システムの進化に、図書館システムを柔軟かつ迅速に適応させることができる知識を持った人材を育成するための「Web アプリケーション勉強会」[133]や、国立情報学研究所の委託事業により、機関リポジトリを永続的に運用するために必要な人材育成を目的とした講習会「持続可能な機関リポジトリのための人材進化構造」[134]を実施している。

また、情報システムに明るい図書館員であるシステムライブラリアンの育成を志向したそれらの新しい情報技術系の研修と共に、国書・漢籍・西洋古版本などの古典籍や資料保存に関する研修会等を実施し、紙媒体資料に関する知識の向上に取り組んできた。

大学図書館が伝統的資料、特に古典籍に関するサービスを利用者に提供する上で、図書館員に求める専門的な知識や技術として以下のものが考えられる。

まず、目録と古版本に関する知識が必要である。大学図書館の通常目録業務はNACSIS-CAT(国立情報学研究所目録・所在情報サービス)システムを使った共同分担目録方式によるため、総合目録データベースを検索して同一図書の書誌データが既にあれば所蔵情報を登録するだけで済むし、同一図書がない場合でも、類似の書誌データを流用して入力するパターンがほとんどである。その結果、参照する書誌データが存在しない特殊な資料の目録を、目録規則等にもとづいて目録担当者が自分で作成する機会が少なくなっている。そのため、図書館員の目録作成に対する意識が低下し、結果として蔵書検索システムOPACで利用者へ提供する書誌データが不十分になる可能性がある。特に古典籍の場合は、現在の図書とは様態が異なる古刊本特有の書誌や形態の調査手法を習得する必要がある。

次に、語学力が必要である。ラテン語など、一般的には使われない外国語で書かれた図書の場合、その言語に関する知識が必要となる。国書や漢籍を読解する能力も同様である。また、古典籍を分類・整理するためには、語学力と共に、特定の学問分野に関する知識である主題知識も要求される。

さらに、蔵書に関する知識が必要である。電子リソースの増加により、図書館員が書庫で資

料そのものに接する機会が減り、所蔵コレクションに関する知識が育ちにくくなっている。そのため、展示会や資料電子化の際などに、展示方法やシステムの知識はあっても、図書館が所蔵する資料をコンテンツとして応用することができないことがある。また、資料保存の観点から、資料そのものの適切な取り扱いや保存、利用方法も知る必要がある。

以上のことから、伝統的な紙媒体資料の保存と提供を行うためには、図書館員が一般的に持っている知識や技術だけでは不十分であり、特別な専門性を育成する必要があることがわかる。

以下の節からは、九州大学附属図書館で実施したラテン語古刊本に関する研修会[135],[136],[137]を例にとり、研修会を実施して得られた知見を基に、伝統的な紙媒体資料、特に古典籍に対する図書館員の専門性育成に効果が期待できる研修方法について論じる。

5.2. 伝統的紙媒体資料に関する研修事例

5.2.1. 九州大学附属図書館「ラテン語古刊本書誌作成研修会」の目的と特徴

伝統的な紙媒体資料に対する図書館員の専門性を育成するために、九州大学附属図書館が実施したラテン語古刊本に関する研修会、すなわち「ラテン語古刊本書誌作成研修会」の目的は、資料を手にした時点から実際に目録を作るまでの過程を、研修参加者全員が同時並行的に共有することにより、古刊本に関する基礎的な知識と目録作成の方法を身につけることにあった。

特徴としては次の3点が挙げられる。第1に、ラテン語で書かれた西洋古典籍の整理技術習得のための研修であること。第2に、教員と共同で行う図書館員の自主研修であること。第3に、単なる語学研修や書誌作成研修にとどまらない資料考察を含んだ研修であること。つまり、タイトルページ等のラテン語を文法的に読み下し、読み込んだ内容を目録規則に準拠して正確な目録記述を作成するだけでなく、課題とした古典籍の書誌学的位置付けや、それが出版された時代背景など、資料の全般にわたって考察するという点である。

この研修会では、手書きの写本に対して印刷刊行された古い本のことを示す「古刊本」という言葉を、一般的に古い時代に印刷された本を表す「古版本」や、主に目録規則中で訳語として使用される「初期刊本(early printed books)」と同義に用いている。「初期」の年代区切りについては諸説あるが、「英米目録規則 第2版 1998年改訂版」[138] 2.12の書誌学的定義を採用し、1800年以前に出版された本を「古刊本」とする考え方をとる。従って、現存数は

限られるものの、1500 年以前に金属活字を用いて印刷されたインキュナブラ(*incunabula*)^a も含まれる。

ラテン語は、ギリシャ語と共に西洋古典語として知られている。現在では日常的に使用される言語ではなくなり、「死語」扱いされることもある。しかし、イタリア語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語などのロマンス諸語は、ラテン語直系の「娘」として発展しており、ラテン語の影響が見られる英語やドイツ語などのゲルマン諸語が「姉妹」と言われるように、その伝統は現代にも息づいている。ラテン語の文字は、いわゆる「ローマ字」である。古典期には、現在のアルファベットより 3 字(J, U, W) 少ない 23 字が使われていた。品詞は、名詞・代名詞・数詞・形容詞・動詞・副詞・前置詞・接続詞・間投詞の 9 つに分類される。名詞類は、性(男性・女性・中性)、数(単数・複数)、格(主格・呼格・対格・属格・與格・奪格・地格)により語尾変化する。動詞は、相(能相・所相)、時称(現在・不完了過去・未来・完了過去・全分過去・未来完了)、法(直説法・接続法・命令法・不定法)、数(単数・複数)と人称(一人称・二人称・三人称)によって変化する。

5.2.2. 研修活動の背景と経緯

九州大学附属図書館では、「ラテン語古刊本書誌作成研修会」を、平成 3(1991)年度から平成 18(2006)年度までの 16 年間に、合計 46 回開催した。参加者の延べ人数は 787 名となり、取り扱った課題資料の数は約 60 点にのぼる。発足当時から中心となって研修会の運営を維持したのは、一橋大学社会科学古典資料センター主催の「西洋社会科学古典資料講習会」を受講して、古刊本に関心を持つようになった数名の図書館員であった。西洋古典籍を書誌的に解明したいという点で図書館員と関心が一致した法学部の教員が指導・助言者となり、全学の図書系職員、法学部や文学部の大学院生がメンバーとして参加した。

より多くの図書館員の関心を喚起するために、節目毎に関連するテーマで講演会を開催しながら、研修会を 5 期にわたって実施した。平成 3(1991)年度の第 1 期から平成 4(1992)年度の第 2 期では、30 名程度の多人数に対する講義形式により、主にラテン語文法の基礎とタイトルページ等の対訳という基本事項を研修した。平成 5(1993)年度の第 3 期からは、初期刊本についての理解をさらに深めることを目標として、10 名以下の少人数で、毎回レポーター

^a 印刷術の揺籃時代に印刷された本。「揺りかご」、「むつき」、転じて「諸事の揺籃期」を意味するラテン語 *incunabula* が揺籃本という意味で使われ、1500 年以前に印刷された本を限定して呼称する。

を決めたゼミ形式による研修を行った。課題となる古刊本について各自予習をした上で研修会に参加できるよう、関連資料は事前に配布した。約4年間の中断を挟んで再開した平成10(1998)-11(1999)年度の第4期、平成13(2001)-18(2006)年度の第5期では、第3期の方式を引き継ぎ、15名前後によるゼミ形式が定着した。

この研修会の発端は、平成2(1990)年10月に開催した九州大学の貴重文物展観において、「ローマ法大全」関係図書を展示テーマに取り上げたことにあった[139]。貴重図書の展示は、図書館が蔵書の特長を内外に公表する良い機会であり、綿密な企画の下、展示図書の選択、個々の図書に関する書誌事項や内容の詳細な調査、展示のポイントを明示した解説書の作成など、周到な準備が必要である。展示対象としたローマ法関係資料は、16世紀から18世紀にかけて刊行されたラテン語の図書であり、解題を作成するにあたっては、解説を担当する九州大学法学部の西村重雄教授(当時)と協力し、図書館員が詳細な書誌事項の確認を行った。現代の図書とは様相の異なる古刊本のタイトルページ上に書かれたラテン語の長文を読む作業は、そのようなことに不慣れな図書館員にとって大きな負担となった。しかし、その作業を通して、研究者と図書館員の双方が、「古刊本のタイトルページは面白い」という同じ感想を持つに至った。同時に、タイトルページ上の情報を簡潔に記述しただけのカード目録からは、古刊本が持つ様々な特徴は伝わってこないという事実を認識した。カード目録には書誌を他と区分し特化するための情報は過不足無く盛られているが、そこに書かれた記述から表現豊かなタイトルページの情報を知ることはできない。これらのことから、西洋古刊本に関する書誌的知識の必要性を実感し、研修会を計画することとなった。

九州大学には、「ローマ法大全関係図書」展観以前から西洋の古刊本を熱心に収集した経緯があった。特に、昭和53(1978)年度購入の大型コレクション「ペラ文庫」(Charles Perrat フランス国立古文書学校教授の旧蔵書[140])と、昭和58(1983)年度購入の「クンケル文庫」(Wolfgang Kunkel ミュンヘン大学ローマ法学教授の旧蔵書[141])が挙げられる。これらの文庫に共通していたのは、それぞれの専門分野に關係する希少性のある刊本や抜き刷りを始めとし、各種書誌、歴史補助学等の周辺分野の学術書も豊富に収蔵していたことである。これらのコレクションの導入に深く関わった研究者の存在と、文庫の整理を担当した図書館員の経験が相俟って研修会の発足を促したと言える。

研究者と図書館員が一つのテーブルを囲み、それぞれの得意分野の知識を出し合って勉強することを目的に研修会を計画したが、研修の真のねらいはラテン語読解を通して「図書館員を育成する」ことにあった。そのため、研修会を、一部の図書館員による個人的な勉強会で

はなく、公式の職員研修会として立ち上げ、学内の図書系職員全員へ参加を呼びかけた。参加者の募集と併せて、ラテン語の予備知識がほとんど無い図書館員の関心を喚起するために、導入として「ローマ法大全刊行史」というテーマの講演会を先行して開催した。

以上の経緯を一覧にまとめ、表 5-1 に示す。次節では、1 期から 5 期の研修会の実施内容について詳しく見ていく。

5.3. 研修実施内容

ここでは、各期の研修会実施体制と研修形式を分析し、研修課題とした図書館所蔵資料とその特徴について述べる。

5.3.1. 実施体制と研修形式

5.3.1.1. 第 1 期 語学研修会「ラテン語入門」の実施体制と研修形式

第 1 期の語学研修会「ラテン語入門」は、平成 4(1992)年 1 月 31 日から 2 月 28 日の毎週 1 回、中央図書館において全 4 回開催した。附属図書館事務部長名で全学の図書系職員を対象に受講者を募集した結果、10 部局から合計 36 名が集まった。前年末の講演会「ローマ法大全刊行史」を聞きラテン語や古刊本に興味を持った者が多かった。研修会の開催時間は、キャンパスが異なる部局の職員やサービス窓口担当者、少人数または単独で運営している図書室の職員も参加しやすいように、敢えて勤務時間外の 17 時 15 分から 18 時 30 分までとした。

第 1 期は、課題資料の選択と関連書誌や辞典類等の参考資料の事前準備を中央図書館の図書館員が行った。文法解説のレジュメと参考資料を研修会当日に配布していた関係で、参加者の大半は受身にならざるをえず、ほとんどが講義形式での研修であった。また、週 1 回というペースで行われた短期集中型研修であったため、課題資料の書誌や関連事項等の下調べを担当する中央図書館の図書館員は準備に追われることとなった。しかし準備の過程で、調査すべき項目とその際参照すべき目録・書誌や人名・地名事典類などが徐々に整理され、資料の物理的特徴に着目しながらタイトルページ等にかかれたラテン語を一語ずつ読み下し、理解していくという研修会のスタイルの原型ができあがっていった。

同じ平成 4(1992)年の 3 月には、「ローマ法大全」展観と同じ要領で「トマス・アキナス」関係図書をテーマとする貴重文物展観を開催した[142]。これは、平成元(1989)年度に大型コレクションとして購入した「トマス文庫」収蔵の「神学大全」を中心とした展示であり、この展示会

表 5-1 九州大学附属図書館ラテン語古刊本書誌作成研修会及び関連行事一覧表

年度	種別	名称	開催期間	回数	日数・頻度	時間帯	人数	課題数	形式
平成2年度	展覧	『ローマ法大全』関係図書	1990.10.15～26	1	12日間	-	-	-	展示会
平成3年度	講演会	『ローマ法大全』刊行史	1991.12.17	1	1日	-	-	-	講義形式
平成3年度	研修会	第1期 ラテン語入門	1992.1.31～2.28	4	1回/1週	17:15-18:30	36	4	講義形式
平成3年度	展覧	トマス・アキナス関係図書	1992.3.17～24	1	8日間	-	-	-	展示会
平成4年度	研修会	第2期 ラテン語中級	1992.5.18～1993.3.17	5	1回/1か月	17:15-18:30	20	12	講義形式
平成5年度	研修会	第3期 ラテン語図書勉強会	1993.5.13～1994.3.3	8	1回/1か月	17:20-18:50	10	14	ゼミ形式
平成10年度	講演会	ローマ著作者の古刊本について －キケロを中心に－	1998.11.16	1	1日	-	-	-	講義形式
平成10～ 平成11年度	研修会	第4期 ラテン語古刊本書誌作成研修会	1998.12.14～1999.11.24	6	1回/2か月	16:00-17:30	21	7	ゼミ形式
平成14年度	講演会	インクナブラの特徴について	2002.6.26	1	1日	-	18	-	講義形式
平成15年度	講演会	西洋古版本の楽しみ	2003.7.2	1	1日	-	16	-	講義形式
平成18年度	講演会	「ローマ法大全」フィレンツェ写本の謎と刊本	2006.7.25	1	1日	-	17	-	講義形式
平成13～ 平成18年度	研修会	第5期 ラテン語古刊本書誌作成研修会	2001.6.25～2007.3.2	21	1回/3か月	16:00-17:30	19	21	ゼミ形式

も研修会活動を活性化させる要因の一つとなった。

5.3.1.2. 第 2 期 語学研修会「ラテン語中級」の実施体制と研修形式

第 2 期の語学研修会「ラテン語中級」は、平成 4(1992)年 5 月から 7 月と平成 5(1993)年 2 月から 3 月の 2 期間に分け、月 1 回のペースで全 5 回開催した。研修会場や時間帯は第 1 期の「ラテン語入門」と同様であったが、参加者は 20 名となった。第 2 期でも、課題と参考資料を図書館員が用意し、文法的なレジュメを西村教授が準備する方式が続いた。しかし、研修会開催の間隔をあけて課題資料選択の作業を部局の図書館員まで広げたことで、中央図書館の準備担当者の負担が多少軽減された。また、この頃には貴重書庫で様々な古刊本を手に取り、タイトルページ上にプリンターズ・マークがあるものを選ぶ作業が準備担当者にとって楽しみとなってきていた。第 1 期に引き続き講義形式をとっていたが、参加者全員に自主性が出てきたのはこの時期からであった。

5.3.1.3. 第 3 期 「ラテン語図書勉強会」の実施体制と研修形式

平成 5(1993)年 5 月からは、初期印刷本についての理解をさらに深めることを目標として、「ラテン語図書勉強会」という名称で第 3 期の研修会を開始した。平成 6(1994)年 3 月までにほぼ毎月 1 回、17 時 20 分から約 1.5 時間、全 8 回開催した。メンバーは第 1 期から参加していた主として洋書目録担当者である図書館員 7 名と、法学部の教員 2 名と大学院生 1 名の 10 名に落ち着いた。第 3 期からは、中央図書館の図書館員が課題資料を選び、関連書誌や参考図書のコピーを事前に配布するようにしたため、参加者は予習をした上で研修会に臨めるようになった。さらに、毎回輪番制で決められたレポーターが、タイトルページの読み方や調査した関連事項を報告し、その後に参加者全員で検討するというゼミ形式が定着した。

平成 6(1994)年度に入り、研修会の中心となって活動していた教員の長期海外出張と図書館員の人事異動によるメンバー交代等の諸事情により、研修会をやむなく中断することになった。

b 印刷者や出版者がタイトルページ等に表示した図案で、一種の商標のようなもの。店の看板の図柄や銘句がマークに取り入れられることが多かった。

5.3.1.4. 第4期「ラテン語古刊本書誌作成研修会」の実施体制と研修形式

その後、5年近くの中断を経て、平成10(1998)年の12月から「ラテン語古刊本書誌作成研修会」という名称で第4期として研修会を再開した。再開するにあたって、平成10(1998)年11月に「ローマ著作者の古刊本についてーキケロを中心にー」と題した講演会を開催した。

第4期の研修会では、西洋古刊本の目録作成者の養成を主目的とし、オリジナルメンバーであった附属図書館情報システム課の図書館専門員が世話係として運営を担当する体制をとった。参加者は第4期から初めて参加する者も含め、図書館員17名、法学部の教員1名、文学部と法学部の大学院生3名の総勢21名という構成となった。2か月に1回のペースで平成11(1999)年11月までの間に全6回の研修会を中央図書館で実施した。第3期までと違い、公式研修会としてのあり方を形の上でも明確にするために、勤務時間内に研修会を開始するようにした。日常業務に大きな支障が出ないよう配慮し、研修時間は16時からの1.5時間程度とした。第4期の研修会では課題は毎回1点とし、事前に資料を配布した。研修方式は第3期のゼミ形式を引き継ぎ、大学院生も含めて毎回レポーターを決めた輪番制がとられた。

第4期終了後、研修会は一年半ほどの休止状態を迎えるが、この間に以前からの懸案事項であった研修内容の蓄積と共有を図るための報告書をメンバー数人で作成し、平成13(2001)年3月に「タイトルページを読む楽しみ」という報告書[143]を発表した。

5.3.1.5. 第5期「ラテン語古刊本書誌作成研修会」の実施体制と研修形式

平成13(2001)年6月から第5期の研修会を開始した。「西洋古刊本に関する基礎的な知識と目録作成の方法を身につけることを目的として、古刊本について総合的に学ぶ。今期は、前半で初歩のラテン語文法を研修することから始める。」という趣旨で改めて新規の受講希望者を募集した。その結果、人事異動でメンバーの3割が入れ替わったが、人数的には第4期とほぼ同数の、図書館員15名、法学部と附属図書館研究開発室の教員2名、文学部と法学部の大学院生2名でスタートした。第5期は、約10年振りにラテン語初級文法の学習から研修を開始し、2回目も引き続き文法を学習した後、第3回目から第4期のゼミ形式による研修に戻した。平成15(2003)年度からは、附属図書館研究開発室の研究開発事項の一つとして「図書館職員の専門性の育成に関する調査研究」が掲げられ、ラテン語研修会も研究開発室の活動に含まれることになった。最終年度には、遡及入力や資料電子化を所掌する附属図書館コンテンツ整備課電子化係長が運営を担当し、毎回約2時間で課題1点に取り組むゼミ形式により年4回開催した。この第5期研修会は、平成18(2006)年度末まで継続し、関連講演

会 3 回を含め合計 24 回となった。

5.3.2. 課題資料の概要

5.3.2.1. 第 1 期 語学研修会「ラテン語入門」の課題資料

第 1 期の語学研修会「ラテン語入門」の初回には、教員の手作りによる「図書館司書のためのラテン語入門」という 10 ページ余りのレジюмеにより文法基礎を学習した。そのレジюмеは、ラテン語の意義・歴史から始まり、名詞・形容詞・現在分詞・動詞の主要な転尾(語尾変化)表までを含んでおり、専門書を持たない初心者が次回以降の文法書として参照できるように配慮されたものであった。2 回目からは実際に図書館が所蔵している図書を課題資料として、タイトルページに書かれたラテン語を教員が用意した文法解説のレジюмеに沿って一行ずつ読んでいく方式をとった。課題資料には、当時未整理であった大型コレクション「トマス文庫」の中から、第 2 回目にトマス・アキナス「神学大全」(ヴェネツィア 1580 年)、第 3 回目に「アベラール著作集」(パリ 1616 年)、第 4 回目にキケロ「弁論術」(パリ 1684 年)と「クセノフォン著作集」(フランクフルト 1594 年)の計 4 点を選んだ。なお、「トマス文庫」のほか、研修会と関係が深い学内所蔵文庫の一覧を表 5-2 に示す。

5.3.2.2. 第 2 期 語学研修会「ラテン語中級」の課題資料

第 2 期の語学研修会「ラテン語中級」では、初前に前年の講演会「ローマ法大全刊行史」で取り上げられた資料である法学部所蔵「ローマ法大全」6 巻本の 6 点(リヨン 1627 年/1965-1966 年リプリント版)を用意し、第 2 回目には、トマス文庫の中から「プロティノス哲学著作集」(バーゼル 1580 年)(図 5-1)と「ヴェルギリウス著作集」(パリ 1532 年)の 2 点を課題とした。第 3 回と 4 回目は中央図書館以外の資料を各部局の図書館員が用意することとし、六本松分館所蔵の「アルハーゼン光学論集」(バーゼル 1572 年/1972 年リプリント版)、法学部所蔵の「ローマ及びアッティカ法」(ライデン 1738 年)が選ばれた。第 5 回目には、中央図書館クンケル文庫の中から「ローマ法大全」(フランクフルト 1688 年)とトマス文庫のクインティリアーヌス「弁論術教程」(パリ 1549 年)の 2 点を用意した。

第 2 期に取り組んだ課題件数は、中央図書館のクンケル文庫 1 点とトマス文庫 3 点、法学部から 7 点、六本松分館から 1 点の合計 12 点であった。

表 5-2 九州大学附属図書館ラテン語古刊本書誌作成研修会に関連する学内所蔵文庫一覧表

文庫名	冊数	由来	内容	所在(所蔵)
ペラ文庫	約3,800	故Charles Perrat教授(フランス国立古文書学校)の旧蔵書 [昭和53(1978)年度大型コレクション]	西欧中世史関係資料, 特に古書体学・西洋法制史・地方史文献を体系的に収める。 シャルル・ペラ文庫目録を刊行(1981年)	中央図書館貴重書庫 (中央図書館所蔵)
クンケル文庫	約4,800	故Wolfgang Kunke教授(ミュンヘン大学法学部)の旧蔵書	ローマ私法・公法, ローマ史, ギリシャ史, バビルス学などを中心とし, ドイツ法史にも及ぶ文献を収める。 ヴォルフガング・クンケル文庫目録を刊行(1988年)	中央図書館貴重書庫 (中央図書館所蔵)
トマス文庫	約250	トマス哲学の形成と展開－13世紀西欧哲学研究文献集成 [平成元(1989)年度大型コレクション]	13世紀トマス・アキナスの著作の古刊本・研究書をはじめとし, その哲学形成の源泉となったギリシャ・ローマの思想家・教父哲学に関する著作の写本, 古刊本, 校訂版及びこれらとの関係領域についての重要研究書・専門誌から構成。	中央図書館貴重書庫 (中央図書館所蔵)
17-18世紀国際法史・国制史コレクション	498	17-18世紀国際法史・国制史学研究文献集成 [平成7(1995)年度大型コレクション]	主として17-18世紀にヨーロッパで刊行された国際法・国制に関する刊本の集成(ラテン語及びドイツ語が大半を占める)であり, 国際法の形成発展期の代表的著作を網羅し, 2世紀にわたるこの分野の法学の発展を通覧しうるコレクション。	中央図書館貴重書庫 (中央図書館所蔵)
桑木文庫	5,027	故桑木彥雄(あやお)九州大学名誉教授の旧蔵書	科学史全般の国内外資料。数学・物理学・天文学・哲学の古典、江戸期和算書等を収める。	中央図書館貴重書庫 (理学部所蔵)

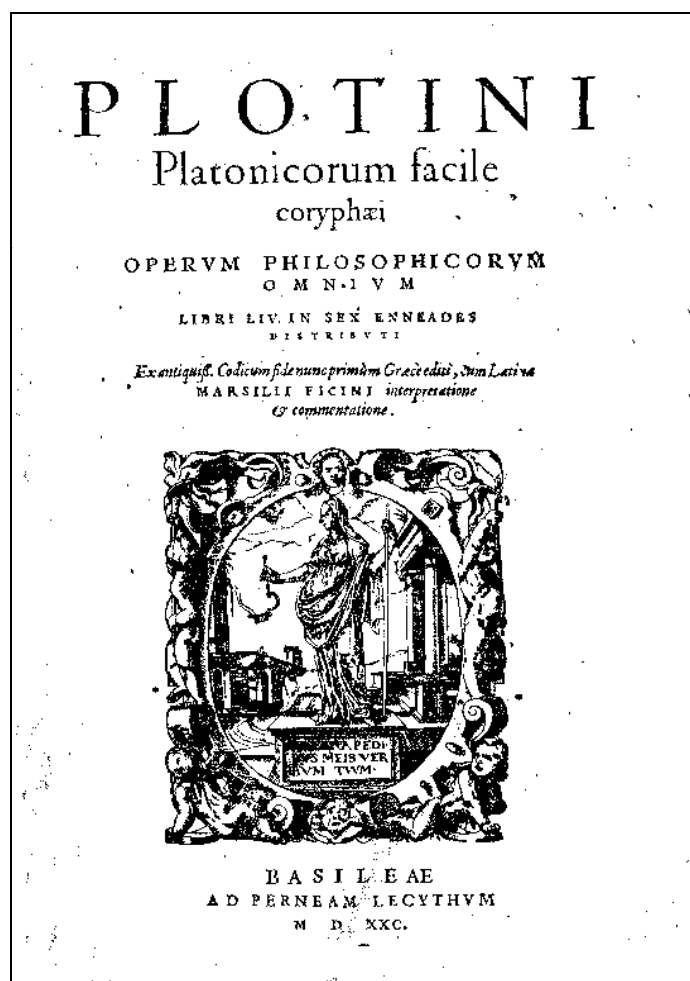


図 5-1 「プロティノス哲学著作集」(バーゼル 1580 年)

5.3.2.3. 第3期「ラテン語図書勉強会」の課題資料

第3期「ラテン語図書勉強会」では、中央図書館の図書館員が整理中のトマス文庫の中から1500年代に出版されたものを中心に課題資料を選んだ。第1回目には、ポエティウス「哲学の慰め」(ケルン 1535年)を、購入時の古書店カタログを参照し、装丁などの物理的な情報にも注目しながら検討した。第2回目は、「プラトン全集」(ヴェネツィア 1513年)、クインティリアーヌス「弁論術教程」(ヴェネツィア 1514年)、同「弁論術教程」(ケルン 1521年)の3点を課題とした。前2点はイタリアの人文主義者・出版者として有名なアルドゥス・マヌティウスの刊行物であり、3点目は第1回目に課題資料として取り上げた「哲学の慰め」と同じ出版者であるケルウィコルヌスによる刊行物であった。このように、第3期には書物史の領域にも関心を向け、トマス文庫の受入用リストを基に出版者や出版年を手がかりとして課題の選択を行うようになった。第3回目には、スイスの出版者フローベンがバーゼルで刊行したディオゲネス「哲学者列伝」(バーゼル 1533年)と「オリゲネス著作集」(バーゼル 1545年)を課題とし、16世紀の宗教改革期における出版業の時代背景なども調査した。第4回目は、人文主義出版者の一族に注目し、フランスのエティエンヌ家のアンリII世が刊行した「イソクラテス演説・書簡集」(ジュネーヴ 1593年)と、アンリI世が刊行したダマスクスのヨアンネス「神学論」(パリ 1512年)を選んだ。第5回目に取り上げた「アタナシウス著作集」(ストラズブルグ 1522年)は、タイトルページが木版画のタイトル囲みで飾られた美しいフォリオ判^oであった。第6回目には、大学出版部発祥の地であるイギリスにおいて18世紀に刊行されたアリストテレス「詩学」(オックスフォード 1794年)と「ホラティウス著作集」(ケンブリッジ 1711年)を、大学出版部の歴史を学ぶことを意図して選択した。第7回目は、マルティン・ユヴェニスが出版したセクストゥス・エンピリクス「諸学者論駁、ピュロン主義哲学の概要」(パリ 1569年)とプロクロス「天球論」(パリ 1553年)を課題とし、プリンターズ・マークと図版に注目しながら長いタイトルを読解した。最終回の第8回目には、アリストテレスの偽作とされる「色彩論考」(フィレンツェ 1548年)を課題とした。

以上、第3期に取り上げた課題は全部で14点であり、トマス文庫の中から、ドイツ、イタリア、フランス、スイス、イギリス各国の初期印刷本を網羅した。

5.3.2.4. 第4期「ラテン語古刊本書誌作成研修会」の課題資料

第4期「ラテン語古刊本書誌作成研修会」の第1回目は、全文画像データベース化されたばかりであった法学部所蔵の特別貴重図書、グロティウス「戦争と平和の法」初版(パリ 1625

^o 印刷された全紙を1回折り畳んで二等分された紙葉から成る2折判のこと。

年)[144]を題材とした。研修会再開後の初回であったため、タイトルページの解説と対訳、書誌事項の確認、関連人名等の調査、折記号^dや判型^e等の資料の物理的な形態に関する調査、プリンターズ・マークの絵解き、NACSIS-CAT(国立情報学研究所目録・所在情報サービス)とOPACへの目録データ登録という、これまでの研修会で確立されてきた手順を確認しながら報告を行い、新しいメンバーにも研修方式が理解できるよう配慮した。

第2回目は、整理途中であった大型コレクション「17-18世紀国際法史・国制史コレクション」より、N.C.リユンカー指導の下にG.S.バウシウスが討論する、公聴会用に出版された学位論文「帝国諸身分の自由について」(イエナ1699年)を課題とした。この種の法学文献が研修会で扱われるのは初めてであり、参考文献や目録規則に沿って文献の性格や、著作上の第一責任者を指導者と討論者のどちらにするかといった著者性などについて活発に意見が交わされた。研修会での議論を受け、コレクションの整理を担当していた情報システム課では、学位論文や討論録(学術的な討論において弁護のために書かれた著作)の整理方針を変更し、新たな取り扱い基準を作成することになった。

第3回目は、第2期に一度取り上げたトマス文庫の「ヴェルギリウス著作集」(パリ1532年)を再度課題とした。第4回目は、トマス文庫よりアルドゥス・マヌティウスが刊行したオヴィディウス「変身物語」(ヴェネツィア1516年)を題材に、この有名な人文主義出版者のイタリック活字、ページ付け、小型本、ギリシア・ラテン古典などに関する業績を再確認した。第5回目は、理学部所蔵の桑本文庫の中から、18世紀の自然科学系出版物であるニュートン「プリンキピア」3巻本(ジュネーヴ1760年)を取り上げた。第6回目は、長期海外出張中であった西村教授に代わり、第3期に参加していた法学部の直江眞一教授の指導の下、法学部所蔵の貴重書セルデン編「フリータ」初版(ロンドン1647年)と第2版(ロンドン1685年)を課題に研修を行った。直江教授が西洋法制史研究者の立場から、13世紀末に書かれたイングランドの法書である「フリータ」について、その成立事情なども詳しく解説した。

第4期に対象とした課題資料は、中央図書館のトマス文庫2点、17-18世紀国際法史・国制史コレクション1点、法学部の貴重書3点、理学部桑本文庫から1点の合計7点であった。

^d 折丁単位に付けられた丁合取りのための文字や記号。

^e 印刷された全紙を折り畳む回数で決まる本のサイズ。1回折れば2折判(folio)、2回折れば4折判(quarto)となる。

5.3.2.5. 第 5 期「ラテン語古刊本書誌作成研修会」の課題資料

第 5 期の第 1 回目は、改めてラテン語初級文法の学習から始め、クインティリアーヌス「弁論術教程」(オックスフォード 1693 年)とセクストゥス・エンピリクス「諸学者論駁、ピュロン主義哲学の概要」(パリ 1569 年)のタイトルページを、教員の解説の下に文法や発音に注意しながら解読した。第 2 回目も引き続き文法の学習から始め、中央図書館が所蔵する貴重図書の中からホップズ「哲学全集」(アムステルダム 1668 年)を題材にした。

第 3 回目からは、第 4 期のゼミ形式に戻し、トマス文庫のマテウス「ギリシャ語辞典」(ローマ 1588 年)を、続く第 4 回目には同じくトマス文庫の中からリヴィウス「ローマ建国史」(ツバイブリュッケン 1784 年)を課題とした。第 5 回目には、インキュナブラの書誌学的調査に訪れた早稲田大学の雪嶋宏一氏により、「トマス文庫所蔵のインキュナブラについて」の講義が行われた。第 6 回目は、前回の講義が契機となり、初めて研修会でインキュナブラを課題とした。アルベルトゥス・マグヌス「神学真理概要」(ケルン 1475 年)の第 1 葉に記された書名、コロフォン^fの印刷者名、祈祷句等を解読し、フランスやドイツのインキュナブラ目録に記述されている異版についても、詳細に書誌的な検討を行った。

その後開催した回を含め、第 5 期に課題とした資料は、中央図書館からトマス文庫 9 点、一般貴重図書 3 点、17-18 世紀国際法史・国制史コレクション 1 点、部局所蔵の貴重図書から法学部 3 点、文学部 2 点、医学図書館 2 点、理学部桑木文庫 1 点の合計 21 点であった。

5.4. 資料の研究手法

この節では、実際に研修会で取り組んだ課題の一つである九州大学法学部所蔵グロティウス著『戦争と平和の法』初版第 3 刷(パリ 1625 年)を例に、ラテン語古刊本を総合的に理解するための研究手法を詳しく見る[137]。この本は全文画像データベースとして公開しており、外観も含め全ページが九州大学附属図書館の Web サイトから閲覧可能である[144]。

5.4.1. タイトルページの解読

タイトルページに何が書かれているのか、辞書で単語の意味などを調べ、語句の性・数・格

^f 初期印刷本や写本の本文の終わりに書かれた覚え書き(奥付)のこと。「終わりの一筆(finishing touch)」を意味するギリシャ語 kolofon を語源とする。多くは、本の標題、著者、印刷者、印刷地、印刷年(写本の場合は書写者、書写地、書写年)などの事項からなる。インキュナブラではコロフォンが本の身元証明をするものであったが、16 世紀以降、次第にタイトルページにその役割を譲ることになる。

の変化等を逐一文法的に検討しながら、全文を理解することが資料研究の最初の作業となる。例えば、**図 5-2** に示したタイトルページ 1 行目の「HVGONIS GROTII」は、固有名詞 Hugo Grotius の男性・単数・属格形で、「フーゴー・グロティウスの」という意味となる。これは、2 行目から 4 行目までの「DE IVRE BELLI AC PACIS LIBRI TRES」、すなわち、「戦争と平和の法に関する三巻本」という書名にかかり、この本の著者を表す。また、5 行目に「In quibus ius naturæ & Gentium」とあるが、この中の naturæ は、原形が nātūra「自然」の女性名詞・単数・属格形であり、jūs「法律」という中性名詞・単数・主格の単語にかかり、合わせると「自然法」という意味になる。研修会で実際に用いたタイトルページの対訳を**資料 5-1** に示す。

なお、研修会で用いたラテン語の代表的な辞書と比較的最近の入門・文法書には、以下のものがある。

◆ 羅和辞典

『羅和辞典(増訂新版)』田中秀央編. 東京, 研究社, 1966.

『古典ラテン語辞典』國原吉之助著. 東京, 大学書林, 2005.

◆ 羅英辞典

Oxford Latin dictionary. Repr. with corrections. P.G.W. Glare [ed.] Oxford, Clarendon Press, 1996.

◆ ラテン語入門書・文法書

大西英文『はじめてのラテン語』(講談社現代新書 1353) 東京, 講談社, 1997.

逸身喜一郎『ラテン語のはなし : 通読できるラテン語文法』東京, 大修館書店, 2000.

岩崎務『CD エクスプレスラテン語』東京, 白水社, 2004.

小林標『ラテン語の世界 : ローマが残した無限の遺産』(中公新書 1833) 東京, 中央公論新社, 2006.

5.4.2. プリンターズ・マークの絵解き

印刷者や出版者がタイトルページ等に表示した、一種の商標がプリンターズ・マークであり、店の看板の図柄やモットーがマークに取り入れられることが多かった。研修会ではそのようなプリンターズ・マークも検討対象とした。

課題例では、タイトルページの中央にプリンターズ・マークが印刷されている(**図 5-2**)。まず、図の中の丸い額飾りに書かれたモットー、「MECVM PORTO OMNIA MEA」を読み解く。

HUGONIS GROTII
**DE IVRE BELLI
AC PACIS**
LIBRI TRES.

In quibus ius naturæ & Gentium : item iuris
publici præcipua explicantur.



PARISIIS,

Apud **NICOLAVM BVON**, in via Iacobæa, sub signis
S. Claudij, & Homini Siluestris.

M. DC. XXV.

CVM PRIVILEGIO REGIS.

図 5-2 「戦争と平和の法」タイトルページ

[<http://herakles.lib.kyushu-u.ac.jp/grotius/top.htm>]

HVGONIS GROTH

Hugonis Grotius (名) Hugo Grotius, 1583-1645
 男・単・属 → 「フーゴー・グロティウスの」(著者)

DE IVRE BELLI AC PACIS LIBRI TRES.
 dē jūs, jūris bellum, ī ac=atque pāx, pācis liber, brī trēs, tria
 (前)について (名)法 (名)戦争 (接)および (名)平和 (名)巻 (基本数詞)3つの
 c.abl. 中・単・奪 中・単・属 女・単・属 男・複・主 男・複・主
 → 「戦争と平和の法に関する, 三巻本。」(本タイトル)

In quibus ius naturæ & Gentium: item iuris
 in quī, quae, quod jūs, jūris nātūra, ae et gēns, gentis item jūs, jūris
 (前) (関係代名詞) (名)法 (名)自然 (接) (名)種族 (副)同様に (名)法
 c.acc. 男・複・対 中・単・主 女・単・属 女・複・属 中・単・属
 = libri [jūs nātūrae 自然法] [jūs gentium 万民法]
 → 「それらの巻では, 自然法と万民法と, 同様に。」

publici praecipua explicantur.
 pūblicus, a, um praecipum, ī explicō, āre
 (形)公の, 国の (名)重大な事 (動)説明する
 中・単・属 中・複・主 所・直・現・三・複
 [jūs pūblicum 公法, 国法] → 「公法に関する大事なことが説明されている。」(サブタイトル)

PARISIIS, Apud NICOLAVM BVON, in via Iacobæa,
 Parīsiī, ōrum apud Nicolaus Buon in via, ae Jacobaeus
 (名)Paris (前)のもとで (名)Nicolas (名)Buon (前) (名)道 (名)Jacques
 男・複・地(=奪) c.acc. 男・単・対 男・単・対 c.abl. 女・単・奪 女・単・奪
 → 「パリにおいて, サンジャック通りのニコラ・ブオンのもとで」(出版地・出版者)

sub signis S. Claudij, & Hominis Siluestris.
 sub signum, ī sanctus, a, um Claudius et homō, minis silvestris, e
 (前)の下に (名)紋章 (形)神聖な (名)Claudius (接) (名)人 (形)森林の
 c.abl. 中・複・奪 男・単・属 男・単・属 男・単・属 男・単・属
 → 「聖クラウディウスと森の人の紋章の下に」

M. DC. XXV. CVM PRIVILEGIO REGIS.
 (数)M=1000, D=500, C=100, X=10, V=5 cum prīvilēgium, ī rēx, rēgis
 1000+(500+100)+(10+10+5)=1625 (前)と共に (名)特認 (名)王
 c.abl. 中・単・奪 男・単・属
 → 「1625年」(出版年) → 「国王の特認を得て」

[銘句/モットー] MECVM PORTO OMNIA MEA.
 =cum+mē portō, āre omne, is meus, a, um
 (動)持ち運ぶ (名)全てのもの (所代)私の
 能・直・現・一・現 中・複・対 中・複・対
 → 「私は私の全財産を私と共に運ぶ」=私の智力は私の最上の所有物なり(Cicero, Paradoxa, I.1,8)

直訳では「私は私の全財産を私と共に運ぶ。」となるこの句は、引用語辞典等で調査すると、キケロの著作『ストア派のパラドックス』(*Paradoxa*, I.1,8)に出てくる言葉であることがわかる。また、タイトルページ 8-9 行目の「聖クラウディウスと森の人の紋章の下に」という出版者に関する記述から、図の中の登場人物について想像することもできる。さらに、図の中央下部にある「NB」の組み文字は、出版者 Nicolas Buon のマークであることが確認できる。

最近では、Web 上でプリンターズ・マークを調査することが可能となった。バルセロナ大学図書館の Web サイト *Printers' Devices*[145]に登録された Nicolas Buon のマークの別バージョンでは、丸い額飾りの外側の左上部に十字架を持った「聖クラウディウス」、右上部に棍棒を持った「森の人」がそれぞれ描かれている。バルセロナ大学図書館の説明文やキケロの著作の該当部分[146],[147]を参照し、中央に描かれた人物はギリシャ七賢人の一人と言われるプリエネのピアスということが確認できる。祖国プリエネが敵に攻略され、避難する人々が自分達の家財を運んでいる最中、ある人から皆と同様に行動するよう勧められたピアスの返事が、「私はそうしています。私は自分のものは全て持ち歩いているのだから」であった。この故事から、引用語辞典では「MECVM PORTO OMNIA MEA」という言葉に対し、「私の智力は私の最上の所有物なり」という意識がつけられている。改めて図を見ると、ギリシャの賢人然とした人物の後方に、荷物を沢山持って逃げる人々や、炎上する城壁などが確認できる。

出版者名の「Buon」でバルセロナ大学図書館の Web サイトを検索した結果、「Buon, Gabriel – Paris (Impr./Llibr. 1558-1596)」「Buon, Nicolas – Paris (1598-1628)」「Buon, Nicolas, vidua – Paris (1628-1666)」の 3 件がヒットする。それぞれの活動時期から、Nicolas Buon は Gabriel Buon の息子であり、Nicolas の未亡人が印刷・書籍業を引き継いだらしいことなどが推測できる。さらに、他の関連文献[148]から、聖クラウディウスは Nicolas が父親の Gabriel から引き継いだ商標であること、森の人は Nicolas が 1600 年に結婚した妻の父親である書籍商 Guillaume Chaudière の商標であることが判明し、「Chaudière, Guillaume – Paris (Impr./Llibr. 1564-1598. Rue Saint-Jacques)」の検索結果から、森の人の図柄が使用されていることが確認できる。

以上のようなプリンターズ・マークの解説に使用する資料や Web サイトを、以下に示す。

◆ プリンターズ・マークの調査

University of Barcelona. *Printers' Devices*. <http://eclipsi.bib.ub.es/imp/impeng.htm>

* 同サイトの Bibliography に掲載された各資料も参考になる。

University of Florida. *Printers' Devices*.

<http://www.uflib.ufl.edu/spec/rarebook/devices/device.htm>

"The Cover design." In *Library Quarterly*, vol. 1, no. 1 (1931) -. Chicago, University of Chicago Press, 1931-.

◆ 引用語等の辞典

『ギリシア・ラテン引用語辞典 (新增補版)』東京, 岩波書店, 1963.

『世界引用句辞典』東京, 明治書院, 1979.

『ラールス世界ことわざ名言辞典』東京, 角川書店, 1980.

5.4.3. 書誌事項の確認

フランス国立図書館 (BN: Bibliothèque nationale de France), 英国図書館 (BL: British Library), 米国議会図書館 (LC: Library of Congress) といった, 各国を代表する図書館の蔵書目録を参照し, 対象資料の書誌事項を確認する。以前は大きな冊子体目録を繰って調査する必要があったが, 近年, 各図書館のオンライン蔵書目録 OPAC の整備により検索が容易になった。各国の代表的な蔵書目録は以下のとおりである。

◆ フランス国立図書館 (BN)

Catalogue général des livres imprimés de la Bibliothèque nationale. Auteurs. Paris, Imprimerie nationale, 1924-1981.

Catalogue BN-OPALE PLUS. <http://catalogue.bnf.fr/jsp/>

◆ 英国図書館 (BL)

British Museum general catalogue of printed books. Photolithographic edition. London, Trustees of the British Museum, 1965-1966.

British Library Integrated Catalogue. <http://catalogue.bl.uk/>

◆ 米国議会図書館 (LC)

The National union catalog, pre-1956 imprints. London, Mansell, 1968-1981.

Library of Congress Online Catalog. <http://catalog.loc.gov/>

フランス国立図書館 (BN) の書誌データ (図 5-3) では, 資料の物理的な形態に関する事項の記述から, 判型, 前付・本文のページ数, 表・追補・正誤表が付されていることがわかる。

最後に記述された「Rogge, 13」は Rogge によるグロティウス専門書誌[149]の参照番号である。

英国図書館(BL)の書誌データ(図 5-4)からは、本文のページ数と判型程度しか確認できない。出版者名が「Apud W. Buon」とあるのは、「N. Buon」のタイプミスのようなものである。冊子体目録にも「W」と書いてあるため、最初に目録を作成した際のタイプミスが OPAC のデータにまで残っているものと推測される。

米国議会図書館(LC)の書誌データ(図 5-5)には、詳しい注記があり、形態に関する記述に加え、LC 所蔵本が初版の第 3 刷と考えられることが参考文献を挙げて示されている。

以上のことを確認した上で、LC の注記において参考文献となっていた Meulen & Diermanse によるグロティウス専門書誌[150]によりさらに詳しく調査すると、1625 年にパリで N. Buon が刊行した初版(no. 565)には 3 つの刷りがあることがわかる。この情報と九州大学法学部所蔵本の内容やページ数等を照合し、正誤表付きで出版された第 3 刷(no. 565^{III})に該当することが確認できる。

5.4.4. 折記号、判型等の形態に関する調査

初期刊本に特有の折記号、判型、装丁等の資料の物理的な形態について、LC 等の書誌データを参照し詳しく調査する。現物の折記号(Signature)を順番に見ると、白紙である[04]の紙葉が欠けていることが確認できる。所々にページ付けの乱れや重複があり、折記号 3C の 2 紙葉の折丁では、1 ページに 2 つのページ付けがある(図 5-6)。判型は 4 折判(quarto=4to)である。外観を見ると、羊皮紙(ベラム)を使って前小口に折り返し部をつけた装丁で、背にタイトルと出版年が手書きされている(図 5-7)。このような形態に関する調査を行い、当該資料の物理的な情報を詳細に把握することで、他の版や刷との比較照合、資料の制作年代や利用形態の推測が可能となる。

初期刊本に関する基本的な参考文献には、以下のものがある。

◆ 初期刊本に関する参考文献

高野彰『洋書の話(増補版)』東京、丸善、1995.

折田洋晴『インキュナブラの世界』東京、日本図書館協会、2000.

Carter, J.『西洋書誌学入門』東京、図書出版社、1994.

Bowers, F. *Principles of bibliographical description*. Princeton, Princeton University

Recherche simple > Index titre > Liste des notices > Notice bibliographique

Notice bibliographique

Rappel de la recherche : TIT = hugonis grotii de jure belli ac pacis libri tres

Mes recherches | Mes préférences | Réservations | Panier

rebondir

Affichage public | ISBD | Intermarc | Unimarc

Grotius, Hugo (1583-1645)

Hugonis Grotii de Jure belli ac pacis libri tres, in quibus jus naturae et gentium, item juris publici praecipua explicantur [Texte imprimé]. – Parisiis : apud N. Buon, 1625. – In-4^e, 16 ff. prélimin., 786 p., tables, addenda, errata. (Rogge, 13.).

Notice n° : FRBNF30544760

Exemplaires et cotes (2)

1 Tolbiac – Rez-de-jardin – magasin
RES- E* – 364
support : *livre*
reproduire

Réserver

2 Arsenal – magasin
4- J- 17 support : *livre*
reproduire

图 5-3 Catalogue BN-OPALE PLUS 检索结果画面

BRITISH LIBRARY **INTEGRATED CATALOGUE**
 Catalogue: Integrated Catalogue

Home About Search Results Previous searches My folder Blank order form
 Add to My folder

Full Record

Format options: [Standard format](#) [Summary](#) [MARC tags](#)

Record 5 out of 19 [← Previous record](#) [Next record →](#)

System number	001521539
Author - personal	• Grotius, Hugo, 1583-1645
Uniform title	• [De Jure Belli ac Pacis]
Title	• H. Grottii de Jure Belli ac Pacis libri tres, etc.
Publisher/year	• pp., 786. Apud W. Buon: Parisiis, 1625.
Physical descr.	4°.
Other editions	• [H. Grottii de Jure Belli ac Pacis libri tres, etc.] Amsterdam, 1631. fol.
Related item	Other edition available: [H. Grottii de Jure Belli ac Pacis libri tres, etc.]
Holdings (All)	Details
Shelfmark	C.38.g.11. Request

[← Previous record](#) [Next record →](#)

图 5-4 British Library Integrated Catalogue 检索结果画面

LC Control No.: 37039658
Type of Material: Book (Print, Microform, Electronic, etc.)
Personal Name: [Grotius, Hugo, 1583-1645.](#)
Uniform Title: [De iure belli ac pacis libri tres](#)
Main Title: Hugonis Grotii De iure belli ac pacis libri tres : in quibus ius naturae & gentium, item iuris publici praecipua explicantur.
Variant Title: Hvgonis Grotii De ivre belli ac pacis libri tres
Hugonis Grotii De iure belli ac pacis libri tres
Portion of Title: De iure belli ac pacis libri tres
Published/Created: Parisiis : Apud Nicolaum Buon ..., 1625.
Description: [36], 506, [2], 553-786, [78] p. ; 26 cm. (4to)
Notes: Title in red and black; device of N. Buon on t.p.
First edition, probably the form marked by raised roman III in J. ter Meulen and P. J.J. Diermanse, Bibliographie des écrits imprimés de Hug
Grotius, La Haye, 1950, no. 565.
Signatures: ã□ ã⁴ ã⁴ ã⁴ A-3B⁴ 3C² 3D-3S⁴ 4A-5Q⁴ .
Prelim. p. [35-36] blank; leaf following p. 506 (sig. 3S4) blank. Sig. 3C, a gathering of 2, carries double page numbering, thus p. 385-392
should be 385-388; 3D1 is paginated 393-400, this sequence continued through 464 (3M4 verso), corrected beginning with 3N1 recto
(paginated 461).
Addenda and errata lists on p. [73-78] at end.
Includes bibliographical references and index.
Subjects: [International law.](#)
[Natural law.](#)
[War \(International law\)](#)
LC Classification: KZ2093.A3 J88 1625

CALL NUMBER: [KZ2093.A3 J88 1625](#)
Copy 1
-- **Request in:** Rare Book/Special Collections Reading Room (Jefferson LJ239)
-- **Status:** Not Charged

图 5-5 Library of Congress Online Catalog 检索结果画面

supra alias ignominiosa censebatur, Num. xxv. 4. Deut. xxxi. 23. 11. Sam. xxi. 26.) eodem die sepeliri iubet. Hinc Iosephus tantam Iudæis ait esse curam sepulturæ, ut eos etiam qui ad patibulum damnati sunt ante solis occasum tollant, & humo mandent. Sed & apud Romanos Vlpianus corpora eorum qui capitis damnantur cognatis ait neganda non esse: imò & quibuslibet petentibus danda censuit Paulus Iuriconsultus. Et Diocletianus ac Maximilianus Imperatores ita responderunt: *obnoxios criminum digno supplicio affectos sepulturæ tradi non vetamus.* Legimus quidem in historiis exempla eorum qui insepulti abiecti sunt, frequentiora ciuilibus quàm externis bellis: & hodie videmus quorundam damnatorum corpora diu in publico conspectu relinqui: qui tamen mos an laudandus sit disputant, non politici tantùm, sed & Theologi. Contrà laudatos videmus qui sepeliri iusserunt corpora eorum qui id ipsum aliis non permiserant, ut Pausaniam. Quòd si Deus interdum sepulturæ iactura quosdam puniit, fecit hoc suo iure supra leges constitutus. Et quòd Goliathi caput Dauid seruauit ostentui, factum scilicet in alienigenam Dei contemptorem, & sub ea lege quæ proximi nomen ad solos Hebræos porrigebat.

v. Vnum tamen notatu non indignum, de sepeliendis mortuis regulam apud ipsos Hebræos habuisse exceptionem eorum qui ipsi sibi mor-

Ccc

L. i. de cad. punit.

L. ii. de.

L. ii. C. de relig.

Roches de consuetud. fol. 12. Abb. 106. es parte. de sepult. 291. in verb. sepultura. quæst. 10.

図 5-6 「戦争と平和の法」本文 Sig. 3C (p. 385-386)

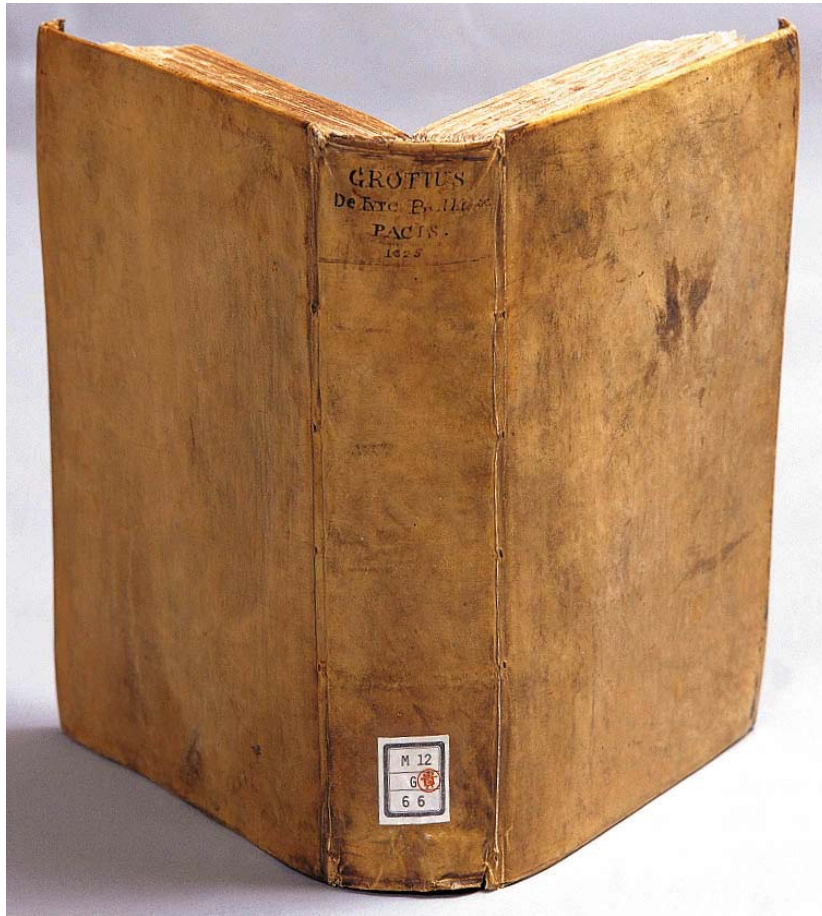


図 5-7 「戦争と平和の法」外観

Press, 1949.

Gaskell, P. *A new introduction to bibliography*. Oxford, Clarendon Press, 1972.

5.4.5. 関連人名, 地名の調査

著者(Hugo Grotius), 出版者(Nicolas Buon), 地名(Paris, via Iacobæa)など, 関連する全ての人名や地名を各種辞典類で調査する。人名調査の際には, ラテン語形と各国語形が異なる場合があるため, 各辞典に掲載されている対照表などを参考にする。また, 地名については, 冊子体や Web 上のラテン語地名辞典で調べることができる。

グロティウスはオランダ生まれの法学者・政治家で, 「国際法の父」として知られている。『戦争と平和の法』は, グロティウスが 1621 年にパリへ亡命し, 当時のフランス国王ルイ 13 世の保護を受けていた時期に書かれた大著である。グロティウスの生涯を調べることで, 同書の出版地がパリで, ルイ 13 世への献辞が付されている理由が判明する。Nicolas Buon が店を構えていた「サンジャック通り」は, セーヌ川左岸のカルチエ・ラタンに現在も存在しているが, ソルボンヌ大学やコレージュ・ド・フランスがこの通りに面しており, 学僧・学者・学生などの顧客が多かったため, 多くの書店や印刷工房がこの通りと周辺に集中していた。

代表的な人名辞典と地名辞典を, 以下に示す。

◆ 人名辞典

『岩波=ケンブリッジ世界人名辞典』東京, 岩波書店, 1997.

『岩波西洋人名辞典 (増補版)』東京, 岩波書店, 1981.

Oxford dictionary of national biography. Oxford, Oxford University Press, 2004.

Biographie universelle ancienne et moderne. Nouv. éd. Paris, C. Desplaces, 1843-[1865]

(Michaud)

Allgemeine deutsche Biographie. Berlin, Duncker & Humblot, 1875-1971. (ADB)

Deutsche biographische Enzyklopädie. München, Saur, 1995-2003.

◆ ラテン語地名辞典

Orbis Latinus. 4. rev. und erw. Aufl. Braunschweig, Klinkhardt & Biermann, c1971.

ORBIS LATINUS online.

<http://www.columbia.edu/acis/ets/Graesse/contents.html>

RBMS/BSC Latin Place Names File.

5.4.6. 資料の背景調査

対象資料の成立過程や歴史的 position を知るためには、その資料の出版に関わる背景も調査する必要がある。初期刊本時代の印刷・出版者は、現代のように職業化したものではなく、言語学者、文法学者、古典学者らが自らの主義主張や研究成果などを発表する有効な手段として印刷業や出版業に携わった例も多かった。彼らは出版業者、印刷業者であると同時に、多くの場合、印刷・出版する本の内容に非常に深く関わっている編集者であり、校訂者でもあった。このため、出版に関わる事項の調査は重要である。

タイトルページの最下行に書かれた「CVM PRIVILEGIO REGIS.」は、この本が国王による「出版特認」を得ていることを表している。印刷・出版者が、王権や教会などの所管当局からその支配圏内での特定の本の印刷や出版の特認や許可を受けた場合、それらの多くはタイトルページ上に *Cum privilegio* ということばで明示されていた。フランスでは 1563 年にシャルル 9 世の王令により、出版許可権は国王にあることが定められている[151],[152],[153]。

1987 年に九州大学がこの本を購入した際の関係書類や関連文献[148],[154]から、『戦争と平和の法』初版は 1627 年に教皇庁によって禁書目録に加えられ、それが解禁されたのは 270 年後の 1900 年であったことがわかる。グロティウスが本文の中で、ローマ教皇に対してカトリックの著者達が使う通例の尊称を付けなかったことが原因だと言われている。しかし、禁書目録に掲載された後も、同書は新教徒の国々で出版され続け、ヨーロッパ各地の大学で自然法及び万民法(国際法)の教科書として重用された。ローマ教皇庁による「禁書目録(*Index librorum prohibitorum*)」は、反宗教改革の動きが強まる中、1559 年に教皇パウルス 4 世によってローマで最初に正式に出版された後、何度も改訂を重ね、1966 年の第 2 ヴァティカン公会議の後に最終的に廃止された[153]。

以上のような書物の歴史に関する日本語の参考文献には、下記のものがある。

◆ 書物の歴史に関する参考文献

Blasselle, B. 『本の歴史』大阪, 創元社, 1998.

Carter, J., Muir, P. H. 編 『西洋をきざいた書物』東京, 雄松堂書店, 1977.

Esdaile, A. 『西洋の書物』東京, 雄松堂書店, 1977.

Febvre, L., Martin, H. J. 『書物の出現』東京, 筑摩書房, 1985; ちくま学芸文庫版, 1998.

宮下志朗『本の都市リヨン』東京、晶文社、1989.

高宮利行『西洋書物学事始』東京、青土社、1993.

5.4.7. OPAC による調査結果の公開

以上の様々な調査・検討結果を踏まえ、最終的には下記の目録規則等にもとづいて、NACSIS-CAT(国立情報学研究所目録・所在情報サービス)へ図書書誌・所蔵データを登録し、オンライン蔵書検索システム OPAC で調査結果を公開する。

◆ 目録規則等

『英米目録規則(第2版,日本語版)』東京、日本図書館協会、1982. (AACR2)

『目録システムコーディングマニュアル』東京、NII、1998.

『目録情報の基準(第4版)』東京、学術情報センター、1999.

Anglo-American cataloguing rules. 2nd ed., 1998 revision. Chicago, American Library Association, 1998. (AACR2R)

『稀観書の書誌記述』国立、一橋大学社会科学古典資料センター、1986. (一橋大学社会科学古典資料センターStudy series, no. 11)

Descriptive cataloging of rare books. 2nd ed. Washington, D.C., Library of Congress, 1991. (DCRB)

松尾恵子「古版本の目録作成」一橋大学社会科学古典資料センター年報. 2007, no. 27, p. 18-42. <http://hdl.handle.net/10086/14115>

松尾恵子, 深沢茉莉「古版本の目録作成 : メンガー文庫の場合」一橋大学社会科学古典資料センター年報. 2000, no. 20, p. 32-52. <http://hdl.handle.net/10086/5423>

初期刊本の書誌作成単位については、『目録情報の基準(第4版)』の「4.2.3. 図書書誌レコードの作成単位」にある「稀観本については、記述対象資料毎に別の書誌レコードを作成する。」という基準に従っている。そのため、データ登録にあたっては、他の参加機関の誤解を招かないよう、「稀観本(1800年以前出版)につき記述対象資料毎に書誌作成」という日本語の注記を、全ての注記に優先し冒頭に記述する。

古版本における「i / j」「u / v / w」については特別の規定があるため、転記の際に確認が必要である。AACR2とAACR2Rの「2.14E. ある種の文字の転記」にも規定があるが、『稀観書

の書誌記述』と DCRB の「0H. 区別的発音符および文字の形」により詳しく書かれている。課題例では、タイトル中の大文字「V」を小文字「u」へ転記し、「I」を「i」としている。ただし、「v」や「j」を使って検索する可能性を考慮し、別書名としてそれぞれの文字による本タイトルを記入している。サブタイトル中の合字「æ」は、「ae」として一字一字を転記する。なお、古版本では、タイトルページ 8 行目「sub signis」の各単語 1 字目のように、「s」が「ſ (ロング s)」という「f」に似た初期的な形になっていることがあるため、「f」と混同しないよう注意が必要である。

著者名が属格形で本タイトルと文法的に分かちがたい時は、タイトルと切り分けずにそのまま続けて記述する。出版年がローマ数字で表示されている場合は、アラビア数字に直して記入する。注記には、版と刷、折記号、ページ付け、装丁など、自館所蔵本の特徴を記述する。結果として、**図 5-8** に示す NACSIS-CAT 図書書誌詳細画面では、通常の本誌データに比べて注記(NOTE)の部分がかなり詳しいものになっている。

さらに、九州大学附属図書館の蔵書検索システム「きゅうと OPAC」では、「戦争と平和の法」の全文画像データベースへの URL リンクも書誌データに追加し(**図 5-9**)、利用者が OPAC の検索結果から当該資料を電子的に閲覧できるようにした(**図 5-10**)。

これらの書誌データを**図 5-11** に示した元々のカード目録と比較すると、データ量が圧倒的に豊富になり、検索の利便性が増したことがよくわかる。

BOOK
 <BA38092311> CRITDT:1998.10.30 CRIFA:<FA003454> RNWDT:2007.12.17 RNWFA:<FA003454>
 CODE: YEAR:1625-
 CNTRY:fr TITL:lat TXTL:lat
 TR: Hugonis Grotii De iure belli ac pacis libri tres : in quibus ius naturae & gentium, item iuris publici praecipua explicantur
 PUB: Parisus : Apud Nicolaum Buon ... , 1625
 PHYS: [34], 506, [2], 553-786, [78] p. ; 26 cm. (4to)
 VT: VT:Hugonis Grotii De iure belli ac pacis libri tres
 VT: VT:Hugonis Grotii De iure belli ac pacis libri tres
 VT: VT:De iure belli ac pacis libri tres
 NOTE: 稀観本(1800年以前出版)につき記述対象資料毎に書誌作成
 NOTE: Title in red and black, device of N. Buon on t.p
 NOTE: First edition. This copy conforms to the 3rd printing as described by J. ter Meulen. Cf. Meulen, Jacob ter. Bibliographie des écrits imprimés de Hugo Grotius, p. 222-227, no. 565[III]
 NOTE: Signatures: ã[6] ð[4] ¶[4] ø[3] A-3B[4] 3C[2] 3D-3S[4] 4A-5Q[4]
 NOTE: Library's copy imperfect: The blank leaf [54] wanting
 NOTE: Leaf following p. 506 (sig. 3S4) blank, and pagination between p. 506 and 553 is broken. Sig. 3C, a gathering of 2, carries double page numbering, thus p. 385-392 should be 385-388; Page 456 incorrectly numbered 458, pages 461-464 in duplicate
 NOTE: Loci scriptorum, index rerum, addenda, and errata lists on p. [1-78] at end
 NOTE: Contemporary vellum with yapp edges, manuscript title on back
 AL: *Grotius, Hugo, 1583-1645 <DA01150916>
 SH: LCSH:International law//K
 SH: LCSH:Natural law//K
 SH: LCSH:War (International law)//K
 <CC0266172246> <FA003454> 九大 法 M 12/G/66

図 5-8 NACSIS-CAT 図書書誌詳細画面

九州大学附属図書館 蔵書検索

九州大学 > 附属図書館 > 図書・雑誌(検索ツール) > きゅうとOPAC

新着図書案内 種別最新番号案内 種別タイトルリスト AV資料案内 OPACに戻る ヘルプ

Hugonis Grotii De iure belli ac pacis libri tres : in quibus ius naturae & gentium, item iuris publici praecipua explicantur

出版者 Parisiis : Apud Nicolaum Buon ...
出版年 1625
大きさ [34], 506, [2], 553-786, [78] p. ; 26 cm. (4to)
別書名 VT:Hveonis Grotii De ivre belli ac pacis libri tres
 VT:Hueonis Grotii De iure belli ac pacis libri tres
 VT:De iure belli ac pacis libri tres

一般注記 稀覯本(1800年以前出版)につき記述対象資料毎に書誌作成
 Title in red and black; device of N. Buon on tp
 First edition. This copy conforms to the 3rd printing as described by J. ter Meulen. Cf. Meulen, Jacob ter. Bibliographie des écrits imprimés de Hugo Grotius, p. 222-227, no. 565[III]
 Signatures: s[6] s[4] r[4] s[3] A-3B[4] 3C[2] 3D-3S[4] 4A-5Q[4]
 Library's copy imperfect: The blank leaf [54] wanting
 Leaf following p. 506 (sig. 3S4) blank, and pagination between p. 506 and 553 is broken. Sig. 3C, a gathering of 2, carries double page numbering, thus p. 385-392 should be 385-388. Page 456 incorrectly numbered 458, pages 461-464 in duplicate
 Loci scriptorum, index rerum, addenda, and errata lists on p. [1-78] at end
 Contemporary vellum with yapp edges, manuscript title on back.

著者標目 *Grotius, Hugo, 1583-1645
件名 LCSH:International law
 LCSH:Natural law
 LCSH:War (International law)
本文言語 ラテン語
コード類 書誌ID=21168723 NCID=BA38092311
URL1 [Image Database](#)

巻冊次等	
分類表の種類	JJ
請求記号	M 12/G/66
資料番号	068152186020813
書誌ID	21168723 ISBN
状態	貴重本
所在場所	法 特別貴重図書
資料区分	図書 刷りの出版年 1625
図書雑誌AV区分	図書 登録日 1998.11.27
利用者コメント	

[前頁](#)

図 5-9 九州大学附属図書館「きゅうとOPAC」検索結果画面

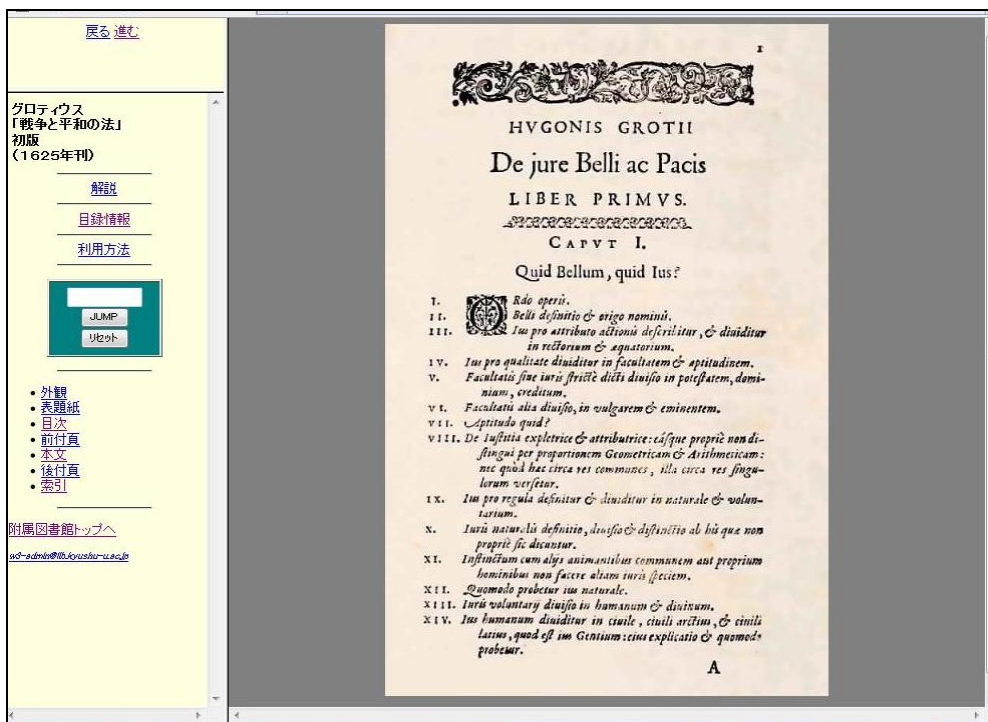


図 5-10 九州大学法学部所蔵「戦争と平和の法」全文画像データベース

[<http://herakles.lib.kyushu-u.ac.jp/grotius/top.htm>]

法学部 Grotius, Hugo.
Hugonis Grotii De iure belli ac pacis libri
tres : in quibus ius naturae & gentium : item
iuris publici praecipua explicantur. -- Paris :
Nicolaum Buon, 1625.
[34], 786, [78] p. ; 26 cm.

Page 456 numbered as 458, pages 461-464 in
duplicate.

3815- Includes "Index"(63 p.), "Addenda"(4 p.), and
186- "Errata"(2 p.).
2081-3




図 5-11 「戦争と平和の法」カード目録

5.5. 研修活動から得られた成果

九州大学のラテン語古刊本書誌作成研修会で得られた成果から、図書館が古典籍のサービスを提供する上で課題となっていた、図書館員の専門的な知識と技術がどのように育成されたかを確認するため、以下に研修活動で得られた主な成果を列挙する。

5.5.1. 図書館員の知的関心の拡大

1 点目は、古刊本を検討する中で、図書館員の知的関心が、ラテン語やヨーロッパの歴史、書物史、製本や装丁、資料保存にまで拡大したことである。研修会参加者には洋書目録業務の経験者が多く、各自が相応の基礎知識を持っている前提ではあったが、ラテン語で書かれた貴重な初期印刷本を手にする機会が増えたことから、通常の日録業務であり必要とされていない事柄に対する興味が次々と起こってきた。その結果、ラテン語の語学力と関連の主題知識が向上するという効果が現れた。

特に、歴史的製本を施された貴重図書の保存のあり方への関心は、資料保存の理論と実際を学びたいという方向へ向かい、資料保存をテーマとした海外図書館の訪問調査[155],[156]や、全国図書館大会の資料保存分科会への参加[157]、保存技術の講習会への参加[158]、館蔵貴重書の修復[159]等が行われた。この資料保存問題への関心の高まりは、その後活発に活動した「九州大学附属図書館資料保存研修会」[160]の発足にもつながった。このように、研修会の中で派生した新しいテーマが展開し、新たな領域で得られた知識が再びラテン語古刊本書誌作成研修会において参加者のものとして共有されるという良い循環が生まれた。

また、同じ目的の下に共同研修を続けたことで、研修会に参加した図書館利用者である教員や大学院生と図書館員との距離が縮まるという効果もあった。

5.5.2. 古刊本を取り扱う際の調査手法の習得

2 点目は、研修会で習得した目録の知識や古刊本を取り扱う際の調査手法が、新規受け入れ資料の整理時に限らず、所蔵資料の遡及入力を行う際にも大変役立ったことである。

例えば、中央図書館のトマス文庫は、インキュナブラを含む古刊本が大部分を占める大型コレクションであったが、未整理段階で 20 数点が研修会の課題資料として選ばれたことにより、その整理がスムーズに進む結果となった。また、平成 7(1995)年度に受け入れられた大型コレクション「17-18 世紀国際法史・国制史コレクション」は、ラテン語とドイツ語で書かれた 17-18

世紀の刊本で構成され、当時の学位論文を多く含んでいるところに特徴があったが、研修会で培われた整理技法によって目録作成と資料の電子化が進められた[161]。平成 8(1996)年度から開始された遡及入力事業においても、カード目録だけでは遡及データの入力が不可能な時などに資料現物の確認が度々発生したが、古刊本の場合には研修会で習得した知識が大いに役立つこととなった。

また、研修会を進めていく中で手元にあるべき参考図書類の必要性を実感し、中央図書館参考図書室の一角に館内所蔵の初期印刷本に関する目録と事典類を集める一方、新たに関連書誌や目録などの参考図書を充実させていく努力をした。

目録と古刊本に関する知識と技術が向上した結果、蔵書検索システム OPAC で利用者へ提供する目録データが充実し、図書館サービスの強化につながった。

5.5.3. 所蔵する貴重図書の再評価

3 点目は、研修会で資料を実際に手にして書誌的事項等を調査することにより、九州大学が所蔵する貴重図書の再評価ができたことである。通常は一旦整理が済むと、再度該当資料を直接手に取ることは少ないが、研修課題として検討することで、それらの資料の歴史的位置付けや価値を認識することが可能となった。参加者が所属する各学部の貴重図書が研修課題として取り上げられ、中央図書館以外の所蔵資料についても認識が高まった。

また、図書館員の蔵書に関する知識が豊富になっただけでなく、教員と大学院生が研修会に参加していたことで、図書館利用者に貴重な資料やコレクションの情報を直接伝えることもできた。

5.5.4. 研修内容の蓄積と共有

4 点目は、研修会の経験を報告書の形で公表したことである。平成 13(2001)年 3 月に刊行した「タイトルページを読む楽しみ：図書館ラテン語入門」(図 5-12)は、それまで蓄積してきた研修内容を参加者以外とも共有することを目指しており、過去の研修会で取り上げた特徴的な課題 7 点を定型的な手順に従って紹介したものであった[143]。報告書の本文は、オヴィディウス「変身物語」(1516 年)、「ヴェルギリウス著作集」(1532 年)、ポエティウス「哲学の慰め」(1535 年)、トマス・アキナス「神学大全」(1580 年)、アベラールとエロイズ(1616 年)、グロティウス「戦争と平和の法」(1625 年)、ドイツ法学文献(1688 年)の 7 章からなり、主要参考文献、用語集、研修課題図書一覧も付した。報告書をまとめる過程において、各章の担当

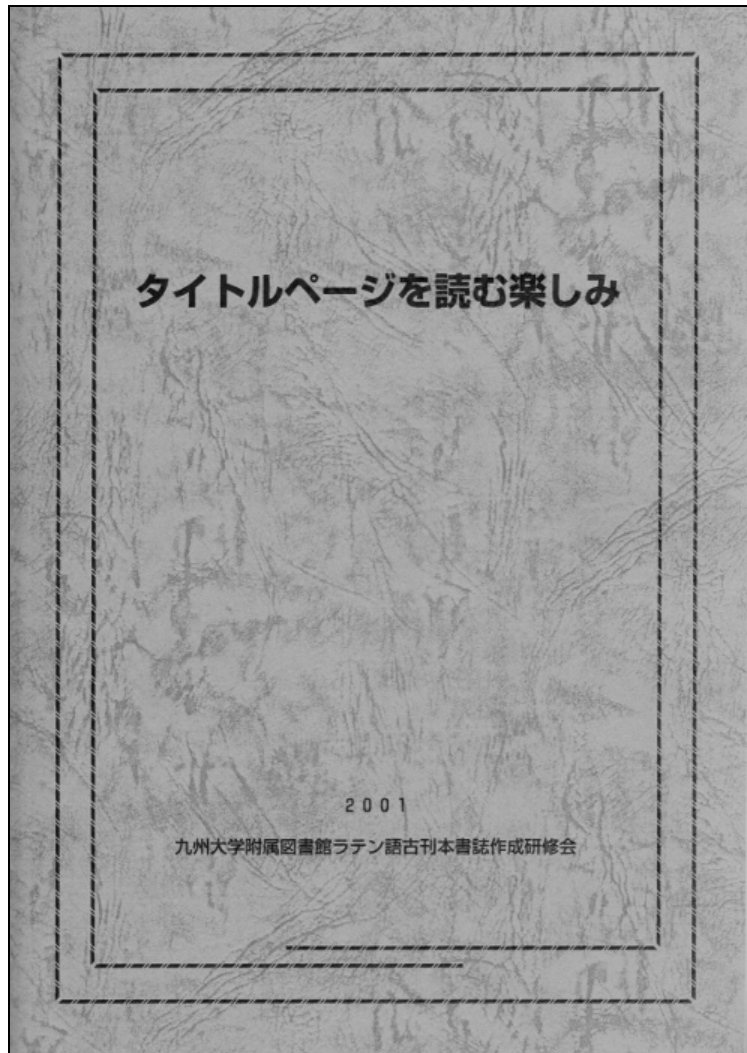


図 5-12 「タイトルページを読む楽しみ」表紙

者は研修会の内容を正確に文章化する困難に直面し、再度課題に取り組み直す必要性に迫られた。その意味では、報告書作成もまた自己研鑽の機会を与えるものとなった。この報告書を学内のみならず学外の大学図書館等にも送付し、学内外における研修内容の共有を図った。

5.6. 研修活動の課題

九州大学附属図書館で実施した研修活動の課題として、以下のことが挙げられる。

5.6.1. 研修テーマの展開

研修会は、人事異動などによるメンバー交代の都度初歩に立ち戻るという方法で実施してきたため、研修内容や方法のレベルアップが難しく、形式も固定化しがちであった。これを打開するためには、各館が所蔵する古刊本を研修材料とするという原則に沿いながら、テーマを絞ってアプローチする方法を試みることも考えられる。例えば、人文主義出版者の一人に焦点を当ててその刊行書を一覧し、特有の技法や印刷物の体裁、活字の特徴などを掘み、さらに学内未所蔵の図書まで調査範囲を広げれば書誌学の一端に触れることになり、研修内容のレベルアップを図ることも可能となりえる。また、「出版特認」、「禁書目録」、「人文主義出版者一族の歴史」、「プリンターズ・マーク」、「バーゼルで出版された本」、「リヨンで出版された本」、等々考え得るユニークかつ多様なテーマを立てて研修することにより、別の視点から古刊本に迫ることもできる。また、それらのテーマによる展示会や貴重資料の電子化を実施することで、研修活動を発展させることも可能である。しかし一方では、常に人事上の新陳代謝を繰り返す図書館の状況を考慮し、新人育成のための初級講座的な部分を維持することも必要である。

5.6.2. 研修会の位置付け

研修会には、図書館員の他に、法学部の教員、文学部や法学部の大学院生らが参加した。「タイトルページを読む楽しみ」の刊行後に学内外の研究者から寄せられたいくつかの質問の内容により、このような方法で書誌学を学ぶことに関心を持っている人文系の研究者が予想外に多いことが判明した。提案方法次第では、研究者と図書館員が一つのテーブルを囲む形で実施するこの種の研修会を、図書館がイニシアティブを取って設定する機会がもっとあるものと考えられる。これはまた、図書館の存在を学内的にアピールすることにも繋がるであろう。しかし、研究者を巻き込むためには図書館員が自分達の専門領域に属する書誌学について、

もう数段のレベルアップを図る必要がある。

なお、九州大学附属図書館には研究開発室が設置されており、その研究開発事項の一つとして「図書館職員の専門性の育成に関する調査研究」が掲げられている。研修会を安定的に継続するためには、異動や退職で中心となるメンバーを欠いた場合などにも対応できるよう、研究開発室の活動と連携して指導・助言者となる研究者を確保しつつ、図書館側の運営体制をさらに整備する必要がある。

5.6.3. 地域への広がり

私立大学図書館協会には実績のある西洋古刊本の研究会が存在し、東京地区や関西地区で熱心な研究活動が行われ、講演会なども盛んに開催されている。しかし、九州大学が位置する北部九州地区ではその様な研究会の存在は知られていない。「タイトルページを読む楽しみ」の刊行後に各方面から寄せられた様々な感想、意見、本の寄贈依頼なども、そのほとんどが東京、関西両地区の大学図書館や公立図書館からであった。しかし、九州地区にも古い資料を所蔵する図書館があり、古刊本について個人的に調査・研究している図書館員がいるものと推測されるため、同じ関心を持つ地域の図書館員との合同研修会へと発展させることも検討に値する。

5.7. 伝統的資料に対する専門性を育成する研修方法

九州大学附属図書館で実施したラテン語古刊本に関する研修会の成果と課題を踏まえ、伝統的資料に対する図書館員の専門性育成に効果が期待できる具体的な研修方法を、以下に提示する。なお、この研修方法は、主に国書、漢籍、西洋古刊本等の古典籍資料に対応するものであり、対象者には一般的な図書館員を想定している。

5.7.1. 実施体制

実施体制は、図書館員が教員と共同で行う自主的な研修とする。研修の運営は図書館員が担当し、主体性を維持する。運営担当者は、有志の職員に任せずに、職指定で決める方が研修会の継続性を保つには適当である。指導・助言者となる研究者を確保するためには、日頃から図書館業務に関して教員と連携・協力できる体制を整えておく必要がある。

開催にあたっては、図書館が主催する公式の職員研修として位置付け、研修会が一部の図書館員による勉強会となることを避けるべきである。

研修参加者は図書館員に限定せず、関心のある教員・学生・大学院生の参加を促し、利用者との距離を縮める機会とする。研修内容と専門分野に近い大学院生には、事前準備の助言者として協力してもらうこともできる。また、近隣の大学図書館にも研修を案内し、同じ関心を持つ図書館員が参加できるようにする。

5.7.2. 研修形式

研修形式は、一方通行の講義形式よりもゼミ形式がより効果的である。輪番のレポーター制をとり、報告者に自ら課題に取り組む責任感を持たせる。その他の参加者には、報告者が用意した課題と関連資料を事前に配布し、予習をした上で研修に臨むことを習慣付ける。ゼミ形式をとることで受講者は主体的に研修に参加するようになり、講義形式で実施する研修でありがちな受動的な受講態度を避けることができる。ただし、節目毎に講義形式の講演会を開催し、参加者以外の図書館員や教員、大学院生等の関心を喚起することも必要である。また、新規参加者のために基礎的な内容を繰り返す配慮もすべきである。

研修内容は、業務に役立つ実務的な部分を主とし、調査だけで終わらせずに実際の目録作成までを各回の目標とすべきである。目録作成に至る手順と調査手法をある程度定型化した方が、初心者にも理解しやすく実践的である。調査に必要な基本的な参考資料を図書館内に整備し、参考となる Web サイトなどの情報も整理しておくとう便利である。

5.7.3. 開催頻度と時間

研修会の開催頻度は、2か月に1回程度が適当である。古典籍という資料の性格上、あまり頻繁に開催すると、事前調査や予習が不十分になり、内容を不消化のまま次に進むことになる恐れがある。また、日常業務が多忙になっている現状から、研修時間は長時間とまらないよう1時間半から2時間程度が望ましい。

5.7.4. 課題資料の選択

課題資料には、図書館が所蔵している資料を用いる。現物を対象とすることで、語学研修や書誌作成研修にとどまらない、資料考察を含んだ研修内容にすることができる。課題資料の選択は、図書館員が行い、新しい知識や埋もれた貴重資料の発見につながるようにする。資料の選択にあたっては、何らかのテーマを設定した方が、参加者の知的関心の拡大に効果が期待できる。時間的な制約もあるため、1回の研修会で取り組む課題資料は各1点が適当であ

ろう。

5.7.5. 研修内容の共有

研修内容の蓄積と共有を図るために、毎回の研修内容の記録を何らかの形で残すべきである。情報の共有により、その場限りの研修に終わらせずに、図書館業務の改善とサービスの充実へつながる実務的な研修とすることができる。また、学内外への波及効果が期待できる。

5.8. 研修活動に対する評価

九州大学のラテン語古刊本書誌作成研修会に対する学内外の評価から、前述の研修方法の有効性を示すことができる。

全国的には、平成 16(2004)年度に、ラテン語古刊本書誌作成研修会の図書館員による自主的な研修会活動の試みが、「図書館職員の専門性の向上に寄与する先駆的な活動」として評価され、国立大学図書館協会賞を受賞した[162]。審査結果報告から、以下のような具体的な評価点が確認できる[163]。①日本や東洋の古文書・漢籍・国書などの書誌作成研修に比べ、西洋古典籍であるラテン語古刊本に関する図書館員の自主研修は希少であり、先行的・独創的意義を持つこと、②遡及入力等の実務や資料展示及び資料保存の取り組み等、図書館活動全般への展開が見られること、③研修活動の成果として、目録作成の有効なツールとなり、図書館員のためのテキストともなる「タイトルページを読む楽しみ」を発行し、大学図書館で共有できるようにしたこと、④研究者との協力・連携による研修会活動を通じ、図書館員の専門性の向上に寄与すると共に、図書館員に対する学内及び地域における社会的な認識の向上にも貢献していること、⑤わが国の大学図書館にとって重要な課題であるサブジェクトライブラリアンの育成に繋がる先行的かつモデルとなる活動であり、大学図書館活動において極めて顕著な意義を持つこと。

また、平成 19(2007)年に、ラテン語研修会のオリジナルメンバーの一人が、一橋大学社会科学古典資料センターが主催する「西洋社会科学古典資料講習会」の講師として招聘された。西洋古刊本に関して日本で代表的なこの講習会で「書誌学」の講義を任せられたことは、九州大学のラテン語古刊本書誌作成研修会の内容が、書誌学的にも評価されたことを表している。一橋大学の講習会では、全国の大学図書館等から参加した受講者 30 名余りに研修活動の内容と成果を直接伝えることができた。さらに、講義内容を論文として同センター年報に掲載したことで[137]、ラテン語研修会で得られた知見を全国的に共有することも可能となった。

九州大学の中では、ラテン語古刊本書誌作成研修会の活動に触発されて、漢籍に関する専門性を持った図書館員を養成することを目標とした漢籍講習会が、学内の中国文学・哲学等の研究者を講師として、平成 15(2003)年度から 4 年間にわたって附属図書館で実施された。平成 19(2007)年度からは、ラテン語古刊本書誌作成研修会と漢籍講習会の一旦の終了を受け、附属図書館研究開発室と連携し、九州大学が所蔵する貴重資料に関して認識を深めること、図書館員の専門性を高めることを目的として、新たに「貴重文物講習会」が開始された。この講習会は、各貴重文物に深く関わった学内外の講師が、その内容や価値、九州大学が所蔵するに至った経緯等について、図書館員及び教員、大学院生を対象に月替わりで講義するものであり、これを契機として新たな資料の発見や成果が生まれている[164]。さらに、図書館の貴重文物講習会を基に、2011年の九州大学創立 100 周年記念事業の一環として、学内の貴重文物をまとめた図書を刊行することが決定した。このように見てくると、ラテン語古刊本書誌作成研修会による図書館員の専門性を向上させる活動が、図書館内外に様々な影響を与えながら、大学の事業にまで発展してきたことがわかる。

5.9. 図書館員の専門性育成のまとめ

本章では、伝統的紙媒体資料に対する図書館員の専門性育成の方策として、図書館で実施している職員研修に注目し、九州大学附属図書館のラテン語古刊本書誌作成研修会で得られた知見を基に、古典籍に対する専門性育成に効果的な研修方法を提示し、九州大学の研修会に対する全国的な評価と学内における波及効果から、その有効性を明らかにした。

ハイブリッド環境下の大学図書館では、学術情報の電子化が進む一方で、主に人文社会科学系の分野において、伝統的な紙媒体の図書資料が教育研究の基礎であり続けている。そのため、大学図書館は、電子リソースの導入と並行して、紙媒体の人文社会科学系研究資料を体系的に収集・整備し、利用者に提供し続ける必要がある。それらのサービスを構築するためには、専門的な知識と技術を持った図書館員の存在が不可欠である。九州大学の実践例から、大学図書館のサービス機能強化のためには、資料の全般にわたって考察し、古典籍の内容に深く踏み込んだ研修を通じて、図書館員の専門性を育成することが必要であることを示した。